

[講演会抄録]

2008年度 連続研究講座：世界の危機と紛争 第2回 「アメリカ vs イラクという紛争」

講師：酒井 啓子
(東京外国語大学教授)

今日は「アメリカ対イラク、という紛争」ということでお話をさせていただきますと思います。

2003年にアメリカがイラクを攻撃したことが、イラクを中心とした中東地域にさらに不安定の種を生んでいます。つまり、イラク戦争の間に起こったことよりも、正式にイラク戦争が終わった2003年の5月1日以降に起こったさまざまな出来事のほうが、実は非常に複雑で、深刻な問題を含んでいます。

アメリカがイラクを攻撃したのは2003年の3月20日から4月30日までです。つまり実際にアメリカがイラクを攻撃していた戦争状態というのは40日間なのです。この40日間で死んだアメリカ兵の数というのは138人です。ところが戦争が始まったときから合計で、命を落としたアメリカ兵は何人かという、2008年10月までの間で4,556人以上です。戦争中よりもアメリカ兵はたくさん死んでいるということですね。なかでも2006年の終わりぐらいから2007年の前半ぐらいまで、米兵の死者がかなり増えました。1日、4人ぐらい命を失うという状態になって、イラクとの交戦状態の時期よりも多くの被害を出したぐらいです。

一方、イラク人は、戦争そのもので何人のイラク人が死んだかはわかりません。少なく見積もってもイラク戦争で10万人ぐらい死んだと思われている一方で、別の調査では60万から70万人、死んだというふうにカウントしています。ともあれ、戦後の2005年から3年間のイラ

ク人市民の死者数を見ると、これは増加がはっきりしています。2006年の終わりぐらいから2007年のはじめぐらいにかけてのイラク人の市民の死者は急増し、月にだいたい3000人近い死者を出しています。遺体もなく、行方不明になっている人たちがたくさんいて、そのような人たちを含めるともっと増えるだろうと思います。

しかし2007年の9月ぐらいから、減ってきました。もっとも、全体に大きな改善がなされたわけではない。そのかわり難民となって国外に出たり、国内で故郷から追い出される人々が増えています。現在、海外に難を逃れて出ていっている人たちが、多く見積もると250万ぐらいいるといわれています。これはイラク人の人口の十人に一人が海外に避難している、という勘定です。国外に出た人だけではなくて、国内で家を追われた人もいます。いわゆる国内難民といわれる人たちが250万ぐらいいます。イラクの全人口はだいたい2500万から2700万ぐらいだといわれていますので、国内、国外での難民はイラク人5人に1人となっている状況です。

アメリカがイラクを攻撃してから、もう5年にもなるのに、なんで、いまだに治安が改善しないのか。アメリカをターゲットにした攻撃だけで、ここまでイラクの治安が悪くなっているというわけではけしてありません。

イラク人の死者が一番、増えた時期は2006年の2月、3月ぐらいからで、そのあと2006年7月からピークを迎えています。これには理由があります。2006年の2月の終わりに、シーア派の聖地であるサマラで、そのモスクが何ものかによって爆破されました。それによって急速に宗派対立が発生するようになります。今のイラクの治安が悪いのは、アメリカを狙って紛争が起こっていることもあるけれども、実は、イラクの国内のイラク人同士戦いを始めてしまって、それが、これだけの死者につながったというふうに見られています。

しかし、実は、今日、ここでお話ししたいのは、本当に宗派対立が原因なのかということです。イラクでは宗派が違うからといって戦争が起こった経験は、これまでありません。シーア派のイランとスンナ派のイラクが戦ったイラン・イラク戦争というのがあったじゃないか、と言われますが、そうではありません。1980年から88年まで起こっていた、イラン・イラク戦争は国境を巡る戦いであり、かつ、政治的なイデオロギーを巡る戦いでした。決して宗派自体を問題にした戦争ではなかったのです。

その当時、イスラーム主義を掲げてイラン革命を起こしたホメイニというシーア派の宗教指導者と、世俗的な社会主義を推進するイラクのフセイン大統領が、政治的なイデオロギーにおいて衝突をしたんです。イラン革命がイラクに波及してしまっただけでは困るので、イランをイラクが攻撃した。これがイラン・イラク戦争の原因です。過去40年近くにわたってイラクという国は基本的に社会主義を執り続けてきました。そこでは宗教的なことはあまり望ましくない、宗教は、むしろ遅れたものというように考えて、欧米型の発展、近代化、産業化ということを進めていこうとしてきました。それがイラク戦争が起こるまでのイラクの政治体制でした。共産主義、社会主義の体制のもとでは宗教を禁じてきたところも多いのです。

ところが、フセイン政権が倒されたあとのイラクの新しい政府はどのような形になっているかというと、これがフセイン時代と逆の性格の政府ができてしまったのです。つまり、世俗主義をやめて、非常に宗教色の強い政治ができました。とくに宗派的にシーア派のイスラーム主義政党が支配する政府になっています。

そのイラクの政権を担っているのが、イラク統一同盟といわれるグループです。イラク統一同盟というのは、いくつかの政党の連合体ですけれども、2005年の選挙で与党として議会の多数派になりました。

イラクは、2003年の5月に戦争が終わったあと、1年後にアメリカはイラク政府に主権を委譲して、イラク政府の政権作りを始めます。イラクは戦後これまでに2回の選挙、つまり2005年の1月の制憲議会選挙と2005年の12月にあった国会選挙で、イラク統一同盟という政党連合が圧勝します。このイラク統一同盟というのは、宗派でいえばシーア派なのですが、それ以上に重要な点は、彼らはイスラーム主義を掲げる人たちの集まりだということです。

イラクではシーア派でも、スンナ派でも宗教に関心のない人たちはたくさんいます。シーア派の中でも、とくにイラン型のイスラーム主義をイスラームの政治に持ち込もうというような人たちが政治に台頭してくるということに関しては、これは、スンナ派の人たちを含めて、多くのイラク人の間に非常に強い警戒心を抱かせます。そこから、今の政府、イスラーム主義を掲げる政権与党に対しての反発、対立が起こってきます。それが、宗派対立のような形態を取って生まれてきます。

とくに一番大きな問題はイラク統一同盟の中でも、とりわけイランに近いグループがSIIC（イラク・イスラーム最高評議会）と呼ばれるグループで、イランに亡命していたイラク人たちが、イランの後押しでイラン国内で成立した政党です。20年以上もイランに亡命していたような人たちが、イラク戦争が終わったからといって、帰国し政権につくということは、国内にずっと残っていたイラク人にとって見れば、あまりおもしろいことではありません。

とくに、SIICが重点的に支配した分野が内務省治安関係、警察関係です。選挙で選ばれたとはいえ、そういったイラク国内の支持基盤を持たないようなイランからやって来たような人々がいきなり政府の中樞に就くということに関して反発する人たちが一斉に出てきました。それが宗派对立という形に見えてきたわけです。

ではどうしてこのようなイスラーム主義政党が選挙で選ばれたのか。一つは、治安の問題です。警察があっても、まだろくに機能していません。フセイン政権の軍は、解体されて、兵隊は解雇されました。そのような状況で、普通の市民を誰が守ってくれるのかというと、民兵です。とくにイスラーム政党はいずれも民兵を育成してきたのです。警察や軍が機能していない以上、人々との治安を守ることができるのは、まさに、こういう政党だったんです。

二つ目の理由は経済です。イラク戦争以降、イラクの状況は経済的にまったく改善していません。

イラクの石油輸出は行われています。生産量も上がっていますが、いっこうに人々の生活はよくなりません。電気一つをとっても、1日のうち、バグダードで2時間とか、3時間ぐらいの電気しか来ないといわれています。

電気がないということはすべての産業施設が動かないということです。だから仕事にならない。製油所が動かないからいくら原油を生産しても使えません。原油を周辺国に売って、代わりに燃料を買わなければなりません。政府の行政、あるいは自治体の行政に頼ろうと思っても、戦後のイラクにおいては行政サービスが崩壊している。政府に社会保障とか、雇用とか、恩給とか、そういったものを頼るような状況にはまったくありません。

そのような中で、誰がそういうことをやってくれるかということ、これがイスラーム勢力です。寄付を集めて、そして施しをする、いわば、税金を取ってその税収で福利厚生を行うという政府の機能とパラレルになります。特にシーア派社会では「五分の一税」、「十分の一税」など一定の比率で信者が寄付することが義務づけられていて、宗教指導者はその寄付金で公共施設を作ったり、貧しい人たちにサービスを提供します。

イラク戦争のあと、政府や行政機構全般がまったく機能しないような状態のときに、唯一、お金を集めて配分するという能力を持っていたのは宗教勢力だったんです。宗教施設がお金を集めて、病院や孤児院を作ったり、失業者に宿や食事を提供できたんです。だからこそ、イスラーム政党が活躍したわけです。そういうような形でイスラーム政党が伸びてきたことによって、ほかのイスラーム的ではない政治グループと対立が起こったわけです。

ところが、最近、起こっていることをよく見ると、実は、宗派对立のような戦いではなくて、イラク統一同盟の中の対立のほうが、今は激しくなっています。この対立にはいろいろな理由がありますが、一番大きな問題は、同じシーア派のイラク人の間にも、イランから帰ってきた亡命政党が大手を振っているのに批判的な人たちが多い、ということです。つまり、純粹にずっとイラクで暮らしてきた人たちが、同じイスラーム主義の人でもイラクの外からきた人たちに反発を持って、それで対立を起こしているのです。

特に対立しているのが、上で言ったSIICというグループと、フセイン政権下でずっとイラクに残って、地下活動をしてフセインの弾圧を我慢してきたサドル潮流というグループです。どちらもイスラーム主義を掲げシーア派ですが、SIICはイランで設立されて、サドル潮流のほうがイラク国内にいた。最近の治安の悪化のほとんどが、この二つの対立によるものです。だから、本質はどこにあるかといいますと、それぞれの宗派が問題なのではなくて、それぞれの政党、政治政党が持つ派閥対立、とくに与党内の派閥対立のほうがよほど問題を起こしているということです。

スンナ派でも同じようなことが起こっています。スンナ派の中でも、政府やアメリカに協力していこうと考えている人たちと、政府に対して反発している人たちと、二つに分かれています。去年の秋ぐらいか

らスンナ派の、とくにファッルージャという大変反米活動の激しかった地域で、アメリカ軍との協力関係が、とくに地元の部族グループとの間で成立し、「覚醒評議会」という地元組織ができました。その後急速にファッルージャという町では治安がよくなりました。ファッルージャのあるアンバール県でアメリカ兵は2006年には1年間380人近く死んでいたのに、2008年には十分の一以下に減っています。

しかし、そう言いつつも、副次的な要因として宗派対立が激化するような要因というのがいくつかあります。その中で重要なことの一つが石油の問題です。イラクの場合は、油田が全国各地に広がっているわけですが、主にイラクで油田のあるのは、南部のシーア派地域と、北部のキルクークというクルド地域とスンナ派地域の間ぐらいのところ、つまり北と南に集中しています。

イラクの石油産業はこれまで政府が広域的に管轄して、石油収入や油田管理、油田開発などは政府がまとめてやってきていました。ところが、イラク戦争が終わって新しい政権になってからは、中央政府が全部、石油を独占するというのはよろしくないのでは、という声が出てきました。地元の勢力にしてみれば、石油が取れるところに住んでいれば自分たちが使って収入を得る権利があるほうがいいじゃないかというような議論を展開するわけです。そうなってくると、石油があるところと、ないところで非常に深刻な対立が出てきます。

特に問題になっているのが、少数民族のクルドです。人口の15から20パーセントといわれていますが、自治、ひいては独立というような方向まで考えたいと思っています。そのために経済的にも、政治的にも自主運営できるような資源が必要であると考えている。その中で石油というのは非常に大きな資源なんです。

ですから、このクルドの人たちにとっても油田管理、石油管理というのを中央ではなく、地方に任せて、自分たちの手でやりたいと考え

ています。シーア派の人たちの一部もそういう考えがあります。ここで難点は、スンナ派です。スンナ派の人たちが居住する地域には、今のところ、いまだに油田が開発されていません。ここで地方分権型で石油政策を行ってしまうと、スンナ派だけが取りこぼされてしまいます。こうした経済的なアンバランスがイラクでの宗派対立を煽る原因になっています。政治政党同士の争いは、けして宗派が原因ではありません。しかし、それに石油が絡んでくると、どうしても、資源を持っている地域と、持っていない地域の対立が激しくなります。

このようなイラクの現状ですが、どうしたら、今の問題が改善できるのかということについては、なかなか解決方法がありません。このように解決方法がなく混乱状態になってしまうということがわかっていたので、イラク戦争が始まったときに、イラク研究者の多くは、アメリカはイラクを攻撃することに大きな疑問を持ちました。アメリカがイラクを攻撃して政権をひっくり返すのに、転覆後のことをよく考えていなかったという問題があります。ですから、ある意味では、今、起こっている問題というのは、イラク戦争をやる前から、イラクを知っている人たちだったら、みんな予想していたようなことです。

そう考えると、もう一度、イラクが、なぜ、このような状態に陥ったかということ、まずはアメリカがちゃんと勉強し直すことが必要です。オバマ政権がこれまでブッシュがやってきたようなやり方に囚われずに、新しいイラク政策を作ることができれば少しは窓が開けるのかもしれませんが。そのようなブレークスルーでもない限り、イラクの情勢というのはなかなか快方には向かわないだろうと思います。